

明治大学平和教育登戸研究所資料館  
第11回企画展 記念オンライン講演会②

資料館開館にむけての明治大学の取り組み



明治大学平和教育  
登戸研究所資料館

館長 山田 朗  
(文学部教授)

## はじめに

[1] 明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館  
(2010年3月29日)

→ 開館に至る大学内での混乱と議論

[2] 行政・市民・遺跡所有者＋遺跡関係者（登研会）  
が連携した 戦争遺跡保存・活用の模索

# 現在の生田キャンパス

# 終戦後の登戸研究所



1947年 GHQ撮影 国土地理院所蔵

2021/5/13

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



1954年に撮影された生田キャンパスの木造建物群

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



1960年代生田キャンパスの木造建物群（吉崎一郎氏撮影）

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



1966年に撮影された図書館  
日本高等拓植学校の本部、のちに登戸研究所本部本館として  
使用された（吉崎一郎氏撮影）

# 資料館開館にむけての明治大学の取り組み

## 1 明治大学による用地・建物の取得

〔1〕 慶応大学・北里研究所・巴川製紙などが利用（敗戦～1950年）

〔2〕 明治大学による跡地の取得（1950年）、  
1951年度より農学部のキャンパスに

建物89棟、土地31,218坪を977万円（1949年の申請時の価格）で取得

### [3] キャンパス整備のため建物の取り壊し、改築 (1970年代以降)

- 1990年代半ばには木造建物2棟（5号棟・26号棟）・鉄筋建物2棟（36号棟・44号棟）と弥心神社・動物慰霊碑・消火栓（2ヶ所）・「弾薬庫」（2ヶ所）などを残すのみとなった。
- 現在、登戸研究所時代の建物は36号棟（現・資料館）のみとなった。



## 2 登戸研究所に関する調査・研究

- [1] ジャーナリストによる調査：斎藤充功・鈴木俊平ら
- [2] 旧軍人（伴繁雄・山本憲藏ら）による回想・証言（1980年～）。
- [3] 元所員による「登研会」の結成（1982年）。

## 〔4〕 市民・高校教員（渡辺賢二氏・木下健蔵氏）と生徒たちの調査

→ 元所員（伴繁雄氏ら）の証言をひきだす

→ 『雑書綴』の発見  
(1989年)

高校生の聞き取りに応じる  
伴繁雄氏  
(木下健蔵氏提供)



## [5] 市民と大学関係者の連携

- 1994年：明治大学、旧登戸研究所**26号棟**の取り壊しを決定。
  - 明大生・教職員、「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成。
- 共同代表に海野福寿文学部教授・森恒夫経営学部教授らが就任。
- **1995年：明治大学内における調査・研究の始まり**
  - 大学（人文科学研究所）の研究費を使った海野教授らのチームによる調査・研究  
「旧陸軍登戸研究所の総合的研究：十五年戦争におけるその意義」→【資料1】

## 【資料 1】人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究—十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果

〔1〕写真家・吉田一法氏に依頼し、生田キャンパス、疎開先である長野県・福井県・兵庫県、人体実験を行った南京病院、阪田機関本部(上海)を取材およびスライド記録を作成。

〔2〕元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および粟田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接收した加藤製紙・西野製紙を調査し、疎開先での第三科の活動を明らかにした。

〔3〕疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。

〔4〕元所員の証言を基に、静岡大学工学部（浜松市）に終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約 1,000 冊を発見。

〔5〕『雑書綴』復刻。(第三展示室に展示中)

〔6〕研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003年）刊行。

出典：第11回企画展展示パネル第4章・表2より作成。

# 陸軍登戸研究所

隠蔽された謀略秘密兵器開発

海野福寿・山田 朗・渡辺賢二◎編

青木書店

研究成果をまとめた  
『陸軍登戸研究所：  
隠蔽された謀略秘密  
兵器開発』  
(青木書店, 2003年)  
刊行 A5判 267頁

## 戦後も残っていた登戸研究所の建物



26号棟（2007年5月撮影）：偽札を出荷するための倉庫  
（2009年老朽化のため解体）。

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



← 東側から見た  
五号棟



五号棟は偽札（偽造法幣）  
が印刷された工場と推定さ  
れている（2010年撮影）。  
（2011年2月老朽化のため  
解体）。

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



5号棟（2007年5月撮影）



# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



農学部1号館裏の「弾薬庫」 (2007年5月撮影)

## 戦後も残っていた登戸研究所の建物



36号棟：第2科生物兵器研究棟（2007年5月撮影）  
（現在の平和教育登戸研究所資料館）

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



36号棟の内部（2007年5月撮影）  
（現在の資料館第一展示室）

# 戦後も残っていた登戸研究所の建物



36号棟の内部  
(2007年5月撮影)

### 3 明治大学における登戸研究所保存・活用の取り組み

#### 〔1〕 明治大学による保存・活用方針の決定

- 1998年：戸沢充則学長（1996-1999）、  
登戸研究所跡地の保存・活用方針打ち出す。
- 学長室「旧登戸研究所の保存・活用について」（1998年2月14日）
- 記念碑を設置した小広場、生田内施設に資料室を設置  
（26号棟は解体）

- 1999年：「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」設置（委員長：津坂伸幸農学部長）
  - 44号棟取り壊しに伴う残存建物の保存・活用を検討
- 「平和資料館」（平和教育の場）として5号棟あるいは36号棟を活用すべき。
- 明治大学創立120周年にあたる 2001年に展示施設、モニュメント設立を決定。
- 争点：「平和資料館」とするのは5号棟か36号棟か、両方か。

## [2] 保存・活用方針の一時凍結

- 2000年：学生自治会・生協と大学との対立激化
  - 大学祭中止、学生部長襲撃事件の勃発
  - 山田雄一学長、「学内正常化」の達成を優先し、登戸保存活動を凍結。
  - 「保存を求める会」の生田生協が中心となり、5号棟内に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置、元勤務員を講師に迎えた講演会等を開催。

### [3] 保存・活用方針の復活と「展示資料館」開設の動き

- 2004年：納谷廣美学長、登戸研究所跡地の保存活用方針を表明。
- 2005年：登研会会長山田愿蔵氏からの学長宛に「施設保存・資料館開設」を求める手紙

→ 【資料2】

- 事前に登研会事務局長・渡辺賢二・海野福寿・森恒夫各氏が懇談
- 関係者の高齢化などにより保存・活用の具体化を急ぐ必要性を確認



## 【資料2】 登戸研究所跡の保存・資料館設置の要望書

明治大学学長 納谷廣美 殿

〔前略〕

戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残り、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します。

### 記

- 1、陸軍登戸研究所当時の戦跡をできるだけ保存していただきたい。
- 2、陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成一七〔2005〕年一〇月三〇日

登研会代表 山田愿蔵

- 2006年：「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」（委員長：坂本恒夫教務部長）設置される。
  - 「展示資料館」は教育施設という位置づけで、教務部長の管轄に。
  - 「展示資料館」は2009年までに設置することを決定。
  - 争点：明治大学が設置することの是非、設置の理念、資料館の「需要」の有無

- 2007年3月：「検討委員会」のもとに「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」（委員長：山田朗文学部教授）設置。
- 6月：「展示専門委員会」中間報告、**資料館の基本コンセプト**を示す。
  - ①**36号棟を展示資料館として保存**し、登戸研究所の全貌を伝える歴史教育・平和教育・科学教育にふさわしい施設とすること。
  - ②登戸研究所に関する資料・文献・証言を収集すること。
  - ③**平和教育の発信地**として、**明治大学における研究・教育に役立てるとともに一般に公開**すること。
- 同月、「展示専門委員会」は生田キャンパスで現地見学会と講演会、展示資料館説明会を開催。

- 2008年：納谷学長、「登戸研究所問題の解決」を選挙公約として再選。
  - 「登戸研究所展示資料館（仮称）」を生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である 36号棟を改装して開館することを正式決定。
  - 6月、展示資料館（仮称）設立の学内調整ワーキンググループを設置。
  - 教務事務室・施設課・博物館・設置準備室（予定）で構成。

→ 7月、登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）設置  
準備室を駿河台研究棟に設置 → 【資料3】

36号棟改装：施設課、展示企画：準備室、  
展示施工：乃村工藝社

→ 作業にあたっての問題点：

登戸研究所に関する共通認識の欠如  
調査・研究をしながらの展示作成

学内混乱の後遺症

実物資料の不足

（多くの資料を渡辺賢二氏からの寄贈に頼る）

## 【資料3】 展示資料館（仮称） 設置準備室の陣容

- 準備室長： 山田 朗
- 展示総監督： 渡辺賢二講師
- 展示総監督補佐： 齋藤一晴講師
- 準備室学芸員： 吉田桃子・石橋星志（DC） → 森麻弥・橋本朋子
- 展示制作担当責任者
- レストスペース（時代背景）： 森麻弥学芸員
  - 第一展示室（登研全容）： 山本智之講師
  - 第二展示室（第一科）： 小山亮（DC）
  - 第三展示室（第二科）： 吉葉愛（MC）
  - 第四展示室（第三科）： 酒井晃（DC）
  - 第五展示室（大戦末期・戦後）： 本庄十喜（DC）
  - その他： 山口隆行（MC）・花岡敬太郎（MC）・阿部靖子（MC）・大堀宙（MC）
- 展示施工：（株）乃村工藝社

DCは大学院博士後期課程の大学院生、MCは大学院博士前期課程（修士課程）の大学院生。

- 2010年3月29日：明治大学平和教育登研研究所資料館  
開館（4月7日～一般公開）
  - 博物館の分館ではなく、教務部管轄機関として開設
  - 開館記念式典における納谷学長のスピーチ
    - 【資料4】

# 明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館 2010年3月29日



右から田畑農学部長、納谷学長、長堀理事長、三木理工学部長  
(いずれも当時)



## 【資料4】明治大学平和教育登戸研究所資料館開館にあたって（2010年3月29日）

開館式典において納谷学長は、1985年におこなわれたヴァイツゼッカー西ドイツ大統領（当時）の演説から「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」という言葉を引用したうえで、次のように述べた。

人びとは、ともすると辛い過去（戦争はその最たるものといえましょう）に目を瞑り、忘却しがちです。しかし、人類の過ちを忘却させないためには、日常的に、目に映る形で過去に向き合うことが必要かつ適当であると思います。〔中略〕

アインシュタイン、湯川秀樹、朝永振一郎などの著名な物理学者が、晩年に原水爆禁止を訴える運動に参加したことからも明らかなおり、自らの発明・発見（研究成果）がその利用如何によっては世界平和を脅かすことにもなる現実に対する反省、悔悟に基づく行動でもあったことを想起すべきです。

この意味においても、私どもは、生田キャンパスに旧陸軍の登戸研究所があったことに加え、このキャンパスが理系のキャンパスであることをも考え合わせ、この地に登戸研究所資料館を開設し、平和教育を展開する「場」を得た意義は、まことに大きいものと考えております。

出典：納谷廣美「開館記念式典のご挨拶」、『季刊・明治』第47号  
(2010年7月15日) 6～7頁。

# 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



弥心神社（現・生田神社）



陸軍の星マーク  
のついた消火栓



動物慰霊碑

〈表面〉 動物慰霊碑  
篠田繭書

〈裏面〉 昭和十八年三月  
陸軍登戸研究所建之

# 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



通称「弾薬庫」(倉庫)

研究所旧本館前のヒマラヤ杉



# 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



36号棟（生物兵器開発）＝登戸研究所資料館（2010年3月開館）

## 4 登戸研究所資料館の意義

- [1] 旧日本軍の研究施設をそのまま保存・活用して資料館にした唯一の事例
  - 資料館（登戸研究所第二科第6班研究棟）そのものが重要な戦争遺跡
  - 大学キャンパス内の戦争遺跡を保存・活用した数少ない事例
- [2] 歴史にはほとんど記録されていない〈秘密戦〉に焦点をあてた、日本ではほぼ唯一の資料館
  - 〈秘密戦〉（防諜・諜報・謀略・宣伝）は、戦争の本質を示すもの。
  - 手段を選ばず、戦時・平時の区別なく、軍人・一般人の区別なし。

### [3] 登戸研究所の全貌、各科の活動の概要を、実証的かつ視覚的に表現

- 登戸研究所で開発された兵器・資材には、人道・国際法規上問題のあるものも多い。
- 戦争という大義名分と研究への没入により、倫理観・人間性を次第に喪失していく。

### [4] 登戸研究所の史実発掘過程をも展示

- 一般市民・高校生が知られざる歴史、戦争の暗部を解明するきっかけをつくった。
- **行政・市民・登研会・遺跡所有者（明治大学）の連携の成果**
- **平和教育・地域連携の発信地**として明治大学も開設を決定

## おわりに

- [1] 歴史教育・平和教育・科学教育の発信地としての「登戸研究所資料館」
  - とりわけ、戦争の裏面（加害的側面）を語り継ぐ場（記憶継承の受け皿）としての意義
  
- [2] 地域住民・教育者との連携を構築する場としての「登戸研究所資料館」

## 【主要参考文献】

- [1] 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた 謀略秘密基地 登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会、1989年）
- [2] 長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会、1991年）
- [3] 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
- [4] 海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発—』（青木書店、2003年）
- [5] 姫田光義監修・旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会編『学び・調べ・考えようフィールドワーク 陸軍登戸研究所』（平和文化、2009年）
- [6] 明治大学史資料センター編『明治大学小史』（学文社、2010年）
- [7] 駿台史学会編『駿台史学』第141号（2011年3月）「特集：戦争遺跡の検証と保存—登戸研究所資料館の開館によせて」
- [8] 山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）
- [9] 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦—科学者たちの戦争—』（吉川弘文館、2012年）
- [10] 明治大学平和教育登戸研究所資料館・山田朗編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）
- [11] 木下健蔵『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』（文芸社、2016年）
- [12] 明治大学平和教育登戸研究所資料館編刊『明治大学平和教育登戸研究所資料館 開館10周年記念誌 年のあゆみ』（2020年3月）